

「制作実習」－復習問題(09).doc

氏名:

クラス:

★ II m7-V7 の行き先、マトメ

さて、
これまでにやってきた“裏コード subV”と“II-Vへの分割”を組み合わせると、Dominat 7th Chord の行き先は II-Vを挟んで4通りできる。

(root motion)				ターゲット		
II m7 - V7 Dm7 - G7 II m7 - subV	P5 下降 = P4 上行	I m7 Cm7	- IV7 F7	I m7 への Dominant Motion	\flat VII B \flat	III E
	同じ Root へ	V m7 Gm7	- I 7 C7	I 7 の分割へ Dominant Motion	IV F	VII B
	m2 下降 = M7 上行	\flat V m7 Gbm7	- VII7 B7	subV から \flat V m7 への Dominant Motion	III E	\flat VII B \flat
	aug4 下降 = dim5 上行	\flat II m7 D \flat m7	- \flat V 7 G \flat 7	subV から \flat V 7 の分割へ Dominant Motion	VII B	IV F
				表	裏	

これらは Turn Back や転調なんかに使えるわけだが、転調 key modulation はまだやんない。
例えば、ひとつのコードがあまりにも長あへく続いて、あきそいな時、ターゲットに向かって逆算して II-V の連結を当てはめイキオイつけて次のコードに突入しちゃうりする。

こーゆーかんちで Harmonize された音楽の教科書があったとする。

Key in C: I, V7/D, I, IV/S

上記みたいな場合コードを増やすより、いっそのこと減らしたほうがイカシテたりする。

Key in C: I, I, I, IV/S

間引いたままでもいいけど、ここでターゲット FM7 に狙いを定めて II-V を逆算して嵌めてみる。

Key in C: I, I, Re. II m7 Ex. D, Re. II m7 sub V of IV sec. D, IV/S

aug4 下降から裏に落とせば、こんなかんちである。

[問1] II-V の連結を使って5小節目へ突入する Chord Progression を2つ創りなさい。

Key in C:

Key in C:

★後期はヴォイスングを勉強しまくるにあたってー Voicing の出自

Voicing とは、Chord Symbol が示すとこの Chord Tone と Tension をいいかんちに並べかえること、なんだけど、
 そもそもなんで Voicing っつーかってーと、、、。

(男と女をあわせた)人間の声の音域は4オクターブ以上にわたる←スゴイ

※声帯の長い男と、声帯の短い女をそれぞれ2パートに分け、和音連結＝和声の骨格が作られた(14C)

教会の中では、ド派手な跳躍や歌いにくい旋律は許されない。よって、各声部はなめらかに繋がるのが前提となる。
 声楽から生まれた四声作法 Four parts writing は、器楽でも基本的な書法となる。

オーケストラでいうならば

			声	弦	木管	金管
1st Voice	Melody	⇒声帯が短めの女性	ソプラノ	第1バイオリン	フルート属	トランペット
2nd Voice	内声	⇒声帯が長めの女性	アルト	第2バイオリン	オーボエ属	ホルン
3rd Voice	内声	⇒声帯が短めの男性	テノール	ヴィオラ	クラリネット属	トロンボーン
Bottom Voice	Bass	⇒声帯が長めの男性	バス	チェロ	ファゴット属	チューバ

でもって、チェロのパートを部分的に補強するかたちで使用されるコントラバス、や、トゥッティを補強するかたちで使用されるティンパニなんか加わったり、して、あとはそれら役割のバリエーションで、色彩に変化をつけていくのがオーケストラ。

よーするに、オーケストラってのは、巨大な四声体ってことね。

で、もって、

和声の発展により、ポリフォニーの声部進行から、ホモフォニーへと音楽の構造がコーダルに向かうにしたがって、概ね“メロディライン、ベースライン、カウンターライン”の3つの旋律に対し、“伴奏形和声”を専門に受け持つパートの存在が浮かび上がってきた。

Voicing 骨太の方針

・メロディライン ・カウンターライン ・伴奏形和声 ・ベースライン	①	ホモフォニー Melody Harmonize 'Comping	声部形	いわゆるクラシック和声とか
・メロディライン ・カウンターライン	②	Melody Harmonize	Sectional Writing	2 way、3 way、4way、Spread、4th build、 Sharing、disonance pile、Cluster、
・伴奏形和声	③	'Comping	Mecahanical Voicing	2 way、3 way、4way、Spread、4th build、
・伴奏形和声	④	'Comping	NonMecahanical Voicing	disonance pile、Cluster、
・ベースライン	⑤			ベーシストにおまかせ。

で、

Sectional Writing はメロディなんかの旋律をゴージャズに補強する役目を担うんで、トップノート(1st Voice)に追従して平行に動くイメージになる、のに対して、'Comping は伴奏を独立設計したものになるんでメロディよりめだたないように、無理の無い音域の範囲内で、Chord に沿って配置が微妙に交換していくイメージね。
 ポップミュージックにて Voicing といえば、概ね Chord Symbol から Voicing を導く上記の②か③を指す事になる。

※ちなみに、声部形はそれらモロモロを俯瞰統合した配置になるので、全体でも単体でも滑らかあ〜につながるよーに、よーするに全部の動きを同時に決めるっみたいいやつってわけで、「録音しちゃってから後でミックス」とか、「編集の素材として」とか、「せーのっでアドリブだ」とかの発想が無かったころの発明品だ。

[問2]括弧()を埋めなさい。

Voicing とは()が示すところの『()と()を、いい音で響くように並べかえる』ってことだ。

★'Comp-① (Mechanical Voicing の概略)

●'Comp-[4way close voicing]

四和音の Chord Tone を Closed Voicing で転回しながら～

CM7 F7 Em7 A7 Dm7 G7 Em7 Ebdim Dm7 G7

Key in C: I sub V III V of II II V III b III dim II V
 T Sec.D T Sec.D S D T PC S D

●'Comp-[4way drop 2 voicing = 4way drop 2nd]

4way close の 2nd Voice をオクターブ下に展開させる

CM7 F7 Em7 A7 Dm7 G7 Em7 Ebdim Dm7 G7

●'Comp-[4way drop 3 voicing = 4way drop 3rd]

4way close の 3rd Voice をオクターブ下に展開させる

※上2声(1st Voiceと2nd Voice)の 3rd インターバルが維持されるのが特徴

CM7 F7 Em7 A7 Dm7 G7 Em7 Ebdim Dm7 G7

●'Comp-[4way drop 2 & 4 voicing = drop 2+4]

4way close の 2nd Voice と 4th Voice (bottom) をオクターブ下に展開させる

CM7 F7 Em7 A7 Dm7 G7 Em7 Ebdim Dm7 G7

以上が、Mechanical Voicing の概略。

よーするに、Drop なんかっつーVoicing はいちばん高い音が動いたら、他の人も隣に行くってこと。

4voice の下に Top Note のオクターブ下を重ねて 5voice にしたりもする。

ユニットがいっぺんに動いちやうってことだ。

もともとジャズのビックバンドのブラスセクションで使ってたのを、ピアニストのジョージシアリングがピアノに移し変えたことから「シアリング奏法」って呼ばれたりする。

この同じ響きの平行移動は、後に説明するかもしれないサンプリングサウンド＝フォームの連結や、Sus4 の拡大解釈につながったりする。

[問3]上段に Bm7(b5)コードを、下段に G6 コードを指定の Voicing で Chord Tone のみ記入しなさい。

4 way close 4way drop 2nd 4way drop 3rd 4way drop 2+4

4 way close 4way drop 2nd 4way drop 3rd 4way drop 2+4

★ケーデンス ≡ 終止法

さてm、

音楽用語で“終止(日本語)”ってのには、3分類あって、それぞれ別の意味を持つてるのに呼び方はいろいろ⇒
 “①カデンツ **kadenz** (独)、②ケーデンス **cadence** (英)、③カデンツァ **cadenza** (伊)”なんで、いちお一説明。

《①カデンツ **kadenz** (独) = 終止形》は、「楽曲とはトニックコードを挟んで切れ目なく繋がったファンクションの集合体」って、ドイツ古典和声の原典に基く K1 (TDT)、K2 (TSdT)、K3 (TST) の3種。

《②ケーデンス **cadence** (英) = 終止法》は、「ハーモニックリズムの解釈に基く楽曲の一区切り」を示す下記4種。

	全終止	~ V - I . Perfect Resolution (完全な解決)
トニックの代理へ解決	偽終止	~ V - VI . Deceptive Resolution (偽の解決)
ドミナントで終わっちゃう	半終止	~ V . Imperfect Resolution (不完全な解決)
教会のアーメン終止	変終止	~ IV - I . Plagal Resolution (変格的な解決)

《③カデンツァ **cadenza** (伊) = 装飾楽句》とは、楽曲の最後の最後のところに挿入される、ソロプレイヤーの演奏技巧を華美に発揮させる為のフリービートなアドリブソロみたいなところ。バイオリン協奏曲とかで導入されたのがオリジナルっぽい。

ちなみに、

“音程(日本語)”と言った場合には、それぞれ別の意味を持つ“ピッチ **pitch**”と“インターバル **interval**”ってなどつちかを指してるんで注意ね。

[問4]括弧()の中に終止法を記入し、そしてアドリブソロと共に打込んでケーデンス感を確認しなさい。

C Am7 F Fm G C Em7 Dm7 G7 Am7

key in C: I VI IV IVm V I III II V VI
 T - S Sm D T - S D T

A^bM7 E^bdim Dm7 D^ø G7 C6 F CM7

^bVI^M7 - ^bIII^{dim} II II ϕ V I - IV I
 T_m - PC S Sm D T - S T